

巻き戻りした悪役令息は

最愛の人から離れて生きていく

アリステル

婚約者ユリウスの
愛する女性を害そうとしたとして
断罪され死に戻った悪役令息。
二度目の生ではユリウスの幸せを
邪魔しないと
決意する。

ユリウス

アリステルの
婚約者にして王太子。
一度目の生ではアリステルを冷遇
していたが、なぜか今回は
アリステルを
気に入っている。

エルレ

創世神教会の司教。
一度目の生でアリステルが
命を落とした教会で働いている。

イレエネ

一度目の生で、ユリウスが
愛していたという令嬢。
しかし、今世では何やら様子が
違うようで……？

ハイノ

ユリウスの側近。
一度目の生ではアリステルを
平民街へ追いやった。

CHARACTERS

プロローグ 世界の終わりにくちづけを

大陸北西部に位置するゼーレンヴェンデ王国。

王都エールデンの平民街外れにある、打ち捨てられた小さな礼拝堂。

長年手入れのされていない廃教会は、至るところが朽ちて、このまま誰にも知られずに崩れていくのを待っているようだ。

ギイイ……

蝶番が錆びて、かろうじて閉じられた扉から、悲鳴のような軋む音が堂内に響く。

暮れゆく夕陽に影がゆらりと浮かび、慣れたように中へと滑り込んだ。

その姿はさながら幽鬼のようで、骨と皮だけの体躯と落ち窪んだ双眸は濁った緑の瞳をした、比較的若い男性と分かる人物だった。その名は、アリストル。街の人間に最も嫌われた元貴族の青年だった。

「……ゴホッ、ゲホッ」

外から吹き込んだ風で浚われた埃が侵入者を襲い、耐え切れず濁った咳が溢れ出る。ひときわ強い咳が喉から迸ると、ゴボリ、と生ぬるい塊が押さえていた掌を濡らしていった。

途端、埃の匂いに混じって鉄の匂いが周囲に漂う。このところ咳き込むたびに血を吐いてしまふ。たぶん肺も壊れているのだろう。

アリステルは汚れてくすんだシャツの袖で、血で汚れた口元を拭う。ふう、と深い息を吐き、ふらつく足取りで祭壇へと近づいていった。

一步、また一步、自身がつけた足跡を上書きし、正面の花園に囲まれた神の姿を描いたステンドグラスへと近づいていく。その間にも血の混じった咳で足を止めてしまふ。しかし、アリステルはそれでも神の御許との距離を縮めようとした。暮れゆく陽を背に、微笑む神へと縋る（すが）ように。呼吸すらつらくても、体のあちこちが軋（こ）んで痛くても、それでも足を前に踏み出した。

ヒュウヒュウと喉が悲鳴をあげても、少しでもかの姿の近くに居たくて、よろめきながら足を前に出す。

この廃礼拝堂は、何もかもを失ったアリステルが、一縷（いちろう）の望みをかけて見つけた住処（すまか）。崩れた床や長椅子の間をすり抜け、ステンドグラスと祭壇の合間で、丸くなって眠るようになって二度目の冬を過ごす。

「……あつー」

飛び出た床板の端につまずき、まともに栄養の取れていないアリステルは、なすすべもなくもんどりを打つ。間近にあった埃を直に吸ってしまい、激しく咳き込み、吐血を繰り返した。

（喉や背中、胸も痛い。もうずっと食べたり、飲んだりしてないからか、力も出てこない）

最後に食べたのは、貧困街のゴロツキに騙されて渡されたパンと水。カビが生え、泥水を薄めた

水だったとしても、命を繋ぐために食べた。結果、嘔吐（おうと）と下痢に悩まされ、やっと起きることはできたものの、例年より寒い日が続いていたせいで路上には残飯すら出なかった。

倒れた衝撃からか、アリステルの乾いた唇が切れ、ジワリと血が滲（にじ）む。舌で浮かんだ血を舐（な）め、弱った腕に力を入れて起き上がろうとする。しかし、弱りきった体は少し持ち上がるものの、すぐに床に突っ伏してしまった。

それでもアリステルは、尽きようとする力を振り絞り、体を前へ前へと這（は）っていく。少しでも神の傍で眠りたいと、本能がアリステルの体を動かした。

積もった埃の上を、花園に囲まれた神を描いたステンドグラスへと近づいていく。よろめく足取りで。光を背に見下ろす神へ縋（すが）るような儼（げん）かな気持ちで。アリステルは眩（くら）しさに目を眇（すが）めながらも距離を縮めていく。

アリステルは罪人だった。王太子の愛し人に対し、悪意でもって愛し人を害そうとした。だからアリステルは王太子の婚約者の立場を追われ、元々良好ではなかった実家から除籍され、挙句何もかも奪われ平民に墮（お）とされた。

違う。自分はそんな事をしていない。ただ、彼女に貴族として自覚するべきだ、と諭（さと）しただけだ。だけど、だれもアリステルの声に耳を傾ける者はいなかった。それは、アリステルの婚約者だった王太子も一緒。アリステルを糾弾し、男の婚約者なんて気持ちが悪いと唾棄（たき）した。それを望んだのは、そもそも王族側だというのに。

周りは敵しかいなかった。男も女も、年上も年下も、誰もがアリステルを嫌悪し嘲笑した。貴族子息が同性の王太子の婚約者など異質で、奇異だと。異物は排除される。

アリステルは初めてまともに相対したユリウスへ、執着にも似た思慕を抱き、それが恋慕と昇華するのに時間はかからなかった。破滅の一步だと気づかず、アリステルは純粋にユリウスに恋をして……地獄に堕ちた。

数歩の道程を這うようにして神の御許までたどり着くと、アリステルはステンドグラスを見上げる。不摂生な生活を送っているせいで、視力も弱っているようだ。

暮れゆく太陽は赤く色づき、まるで血染めのような感じながらも、霞んだ視界で目を凝らして眺めている。

何かに守られているのか、罅ひとつない玻璃の絵。色とりどりの花に囲まれて佇むひとりの人物。それは世界の殆どで信仰される始まりの神、エルリューゲン。

月色の髪と蒼天の瞳の神は、慈愛の微笑を浮かべてアリステルを見つめている。万人を見守る穏やかな春色の青空の目。

(……ああ、やはりあの方によく似ている)

脳裏に数年前の姿のまま止まった最愛の人の姿が浮かんだ。

きっと今も彼の人は、神のように美しい青年になっているだろう。

(会いたい……でも、もう二度と会えないし、多分、そこまで生きていくのは無理だろう。自分の命が尽きているのを自覚している)

アリステルは目を閉じ、目蓋の裏に浮かぶ彼の人に思いを馳せる。

思い出すのは、穏やかに微笑む姿ではなく、厳しい顔で激昂する姿ばかりが浮かぶ。かたわらに美しい男爵令嬢を侍らせて。その存在を守るように、春の空の瞳は凍てつく氷の瞳となつて、アリステルを鋭く睨む。長い間、何度も見続けてきた冷たい目だけが、アリステルの記憶の全て。きっと、彼はアリステルを嫌っていた。自覚もしていた。だけど。

(しあわせを願うなら自由……だよね)

弱った体を叱咤し、床に這い蹲る体を起こして、震える指で祈りの形を作る。煤けた額を組んだ指に押し当て、ただただ彼の人の永遠のしあわせを祈り続ける。

『男の婚約者なんて吐き気がする！二度と私と彼女の前に姿を現すな!!』

脳裏に浮かんだ柳眉を嫌悪にひそめてアリステルを糾弾するあの日の光景。その姿は心底アリステルを嫌悪しているのがありありと分かり、微かにあった恋情が粉々に砕け散った。

傷心のアリステルに向けられたのは悪意だけではない。そもそも愛情さえなかった父も、簡単にアリステルを見放した。底えは自身の立場を危うくすると判断したのだ。

放心状態のアリステルは、少しだけの金貨を握らされただけで、市井に放り出された。手の中の小さな革袋に入った金額は、貴族子息だったアリステルが生きていくのに到底足りないものだった。その少ない金も、あつという間に、騙され奪われてしまった。

因果応報の自覚はある。

彼の人の愛する人を傷つけ、何度も仲を引き裂いたと言われたアリステルは、貴族子息から平民へと墮とされた。彼の人の愛する人は平民たちから憧れの対象となり、その彼女を虐げた^{しいた}と流布されたアリステルに対し、皆、敵意を隠すことなく向けてきた。

暴言ならまだいい。足を引っ掛けられたり、石を投げられたりはしょっちゅうで、酷い時は物陰で暴力をさんざん振るわれた。

傍観していた者も、嫌われ者のアリステルに冷酷だった。かろうじてかき集めた銅貨で物を買おうとしても売ってはいくれない、そのあたりに生える草や濁った水、貧困街で騙されて買うことになった腐った食べ物で生きてきた。それはアリステルから生きる意味を奪うには十分の罰だったといえるよう。

白銀の美しかった髪は艶もなくボサボサで、頭を洗う機会も少なく、血と脂に塗れたまま。白磁の肌も垢の浅黒さに変わり、栄養のない腕は枯れ木のように細い。

たった数年で美貌の侯爵子息は浮浪者になり果て、昔の彼を知る人が見ても、アリステルとはわからないだろう。

(きっと、あの方も僕の今の姿に気づかないだろう)

彼の人^{あの人}がアリステルを見かけても、路傍の石を見るような視線しか投げてこない。それでいい。それだけのことを、アリステルは犯したのだから。

好きだから。彼の人の婚約者だから。侯爵子息だから。

男爵令嬢ではなく、侯爵子息の自分のほうが、彼の人に相応しい。故に排除するべきだ。貴族子息だった自分は、ひとつの疑問すらなく、それを当然と思っていた。

間違っていないと、自分は正しいと勘違いして、彼の人の周りから人を排除していった。

だって自分は彼の人の婚約者なのだから。そうするべきだと疑っていなかった。

何度周囲の善意ある人がアリステルを諫めても、小さな箱庭で最小限の知識しか与えられなかったアリステルの耳には届かなかった。

(その結果が、今の僕なのけど……)

断罪され、実家からも追い出され、身分も奪われ。地獄に堕ちてはじめて、アリステルは自身の罪に気づいた。だから人から忘れ去られた礼拝堂で祈る。自らの罪と、彼の人のしあわせを願う。いつか彼の人^{あの人}が王となり、男爵令嬢は王妃となり、正しく美しい国にあればいいと希う。

それは何もなくなったアリステルに許された唯一のことだった。

ふわり、と頭を撫でられる感じがして、閉じていた目を開く。

目の前は夕日が沈む間際だというのに、なぜか赤く、朱く染まっている。

つう、と頬が濡れた。枝のような指で拭くと、べったりと赤がまとわりついている。そこで思い出す。教会に来る直前、男爵令嬢を崇拝する浮浪者が投げた石が、頭にいくつかぶつかったことを。そのひとつが頭皮を切り、血が溢れたのだらう。

アリステルは構わず美しく罪人^{アリステル}を見下ろす神を見上げる。血が目に入り、その姿はどんどん霞ん

でいくけども、彼の人を思い無心に祈り続ける。悲しい出来事が彼の人に降りかからないようにと。アリステルは自分のことではなく、自分を切り捨てた相手の幸せを願っていた。

（ああ……目が暗くなってきた。だけど、最後まで彼に似た神の姿を見たい）

肩や背中が冷たく濡れた感触と共に、体の熱が薄れていくと分かってても。

もう起きていることもできず、埃の積もる床に這うように倒れても。

赤く染まる目が全てを歪め、見えなくなっても。

アリステルは願う。

もう二度と会うことのできない、かつての婚約者の多幸を。

願う。望む。希う。念ずる。祈る。

どうか、どうか、しあわせであれ、と。

命の灯火が消えていくその時まで、アリステルは愛する人の幸福を哀願し続けた。

「アリス！」

今、まさにアリステルの命が消えかけようとした刹那。床に倒れ臥し、それでも濁った目で神を見るアリステルの名を叫ぶ声を耳に感じた。目も殆ど見えず、耳もぼんやりと聞こえている状態で。それはまさにアリステルが聞きたいと願っていた、もう二度と聞くことはないと思っていた愛おしい人の声音だった。

思いが強すぎて、幻聴まで聞こえるようになったのかと、アリステルは唇を歪める。こんな街の片隅にある小さな魔礼拝堂で、高貴なる彼の人声が震わせて自分の名を叫ぶなんて有り得ないのだ。

あんなに冷たい声で婚約破棄を言い渡した彼が、今にも泣きそうな声で叫びながら名を呼ぶなんて……ない。だからこれは自分の燃えつきようとする命の灯火が見せた願望。

そう……思っていたのに。

「アリス！ ああ、なんてことだ……！」

駆け寄る足音と、悲嘆に暮れる懐かしい声と、抱き上げる力強さと温もりに。死にゆく自分へ、神が与えてくれた最後の夢。

「……ゆ……り、う……す、さ」

掠れた声が愛おしい人の名を紡ぐ。すると、彼の人アリステルの骨と皮になった体を抱きしめる。手加減されたユリウスの腕は、熱いほどに温かく、微かに震えていた。

「アリス！ 逝かないでくれ、アリス！」

濡れたような声で、むかし彼が一度も呼ぶことはなかった愛称が途切れて聞こえ、なんて都合の良い夢だと乾いた唇が笑みに歪む。

好きだった。冷たくされても、あなたが恋しかった。あなたが自分の方を見ていなくても、あなたが彼女を愛していたとしても、あなたの笑顔を見ているのを幸福だと思っていた。

できれば、一度でもいいから、あなたの声で「アリス」って呼んでくれたらと、秘かに願っていた。

(だけど……夢だとしても、こんなに嬉しい夢はない)

これまで熱のこもった声でアリステルの名を、彼の人から呼ばれる記憶なんてなかった。だけどアリステルは、どんな感情のある声でも自分の名前を呼んで欲しかった。夢とはいえ、こうして呼びかけてくれるとは。なんてしあわせなのだろうと、アリステルの骨の浮かんだ胸は温かくなった。ごぼ、と血が溢れる。濁った眼から涙が滔々^{とうとう}と流れ、血と混じって顔を濡らしていく。止まらない。命が溢れて、流れて、消えていく。

お願いです、神様。この恋情までも、流れて消えていかないで。死の瞬間まで、彼の人を思い続けることを許してください。

「かみ……さ……ま、あ、りが……と。ゆり、う、す、さま……あ、い」

愛しています、と唇を動かしたが、果たして、彼の人に届いたのだろうか。

落ち窪んだ目尻から、透明で美しい涙が頬を流れていった――。

一 巻き戻った世界

侯爵令息のアリステル・エルネストは、婚約者で王太子であるユリウス・ゼーレンヴェンデから断罪されたのち貴族籍を廃され、平民堕ちの果てに飢えと怪我が原因で廃礼拝堂にて命の火を消した……はずだった。

「……え？」

新緑の瞳を開いた途端、間の抜けた声が自然と溢れていた。

ボロボロの廃礼拝堂にある、エルリューゲン神を描いたステンドグラスに、見下ろされているはずだった。だが今、アリステルの視界の先にあるのは、柔らかな金の髪の間から見える春空の双眸だったのだ。これを驚かずして何に驚けばいいのだろうか。

その春空は、アリステルが最期に見た景色。死して尚、またまみえることができたとは。

「ユリウス殿下……？」

「大丈夫？ アリス」

思わず目の前の高貴なる人の名を呼べば、安心したように蒼天の瞳を細めて、ユリウスが安堵の吐息をこぼす。初めて見る表情を、アリステルは訳が分からず混乱した。

(これはどういった状況なのだろう。それに「アリス」って……)

まとまらない頭で現状を思案しながら、アリステルは寝ていた体を起こす。どれだけ寝ていたか分からないが、体の血が下がってクラリと眩暈がすることから、結構な時間が経っていたようだ。不安定な血の巡りを落ち着かせるように、ため息をひとつ落として「大丈夫です、ユリウス殿下」と、視線を合わせず謝罪をする。

アリステルの行動を見たユリウスの春空の瞳が、わずかに曇ったのにも気づかなかった。

かつてアリス、と呼んで欲しいと願ったのは、アリステルからだった。だけどユリウスは一度として『アリス』と呼んでくれることはなかった。

「あの……ここは？」

白で統一された室内は、静謐な中にも華やかさがある。ベッドも清潔で、シワひとつない。しかしどこにも見覚えがなく、質問がこぼれ落ちる。

「ああ、この部屋は教会内にある、王族用の貴賓室だよ」

王族用の貴賓室、と口の中で呟く。だから室内の隅々まで手入れが行き届いているのかと、納得できた。

「そんな場所を、僕が利用してもいいのでしょうか」

「大丈夫。……アリス。顔を上げて」

「は、い」

俯いていたかったが仕方がない。アリステルはキュツと唇を噛み、顔を上げる。すぐ近くにユリウスの整った尊顔そんがほがあり、胸がドキリと震えた。

「君はどうして、ここで寝ているのか、覚えている？」

「……いいえ」

目を伏せ言葉を返すと「そうか」とユリウスが静かに言い、アリステルの現状を教えてくれた。婚約式の最中、突然倒れたという。そこでアリステルはある事に気づく。どうして「また」ユリウスと婚約式をしているのだろう、と。

「婚約式は……」

なぜ、再び婚約式が執り行われたか分からない。だが、婚約が成立したのなら、アリステル側から婚約を解消するすべはない。

「つつがなく締結した。つまり、アリスと私は正式に婚約したことになる」

淡々とユリウスが説明するのを聞きながら、アリステルの体から血が引く。絶望を詰め込まれたように感じた。

（もう、婚約が成立していたなんて……）

成立したものを、格下のアリステルから覆すことはできない。

そもそもこの婚約は仕組まれた物だ。断れば不敬罪として、侯爵家であろうとも、一族郎党が処刑されるだろう。ユリウスとアリステルの婚約を画策した人物は、それだけの力を持っていた。

（この婚約の意味は分からない。でも、またあの断罪が繰り返されるのなら、それまでにどうにかしないと……）

脳裏を悪夢がよぎる。

元々、淡々とした婚約関係だったが、男爵令嬢が現れてから、ユリウスの態度が如実に冷たくなった。同時に、アリステルが憎気^{りんき}から、男爵令嬢を虐^じめたところから噂が立つようになった。

(このままだと行き着く先は、あの地獄のような日々だ)

断罪された理由が事実であれば、自業自得としか言いようがないが、アリステルは男爵令嬢に何もしていない。にもかかわらず、反論する間もなく糾弾され、平民に墮とされたのだ。まるでそうなることが最初から決められていたかのよう。

(そんなのは嫌だ……)

恐怖にアリステルは自らの体を抱きしめる。

婚約が成立した以上、ユリウスから婚約を白紙、または破棄を切り出すしか道がない。

(穏便に婚約を解消するには、どうしたらいいのか)

王家からユリウスとの婚約を申し込まれ、父に厳命されて、アリステルは承諾してしまった。王太子の婚約者という立場から、短絡的^{たてがみ}で居丈高^{いさだか}だったのは嘘ではない。だからといって、ユリウスは男爵令嬢と恋仲になった挙句、アリステルに謂^いれもない罪を着せて断罪した。そのためアリステルは全てを奪われ、ボロ布のような姿で、朽ちた街の礼拝堂で生を終えた。

本当にアリステル自身は、そこまでの大罪を犯したのだろうか。ただ、自分はユリウスと幸せになりたかっただけだ。

「アリス？　どうかした？」

苦い思いを飲み込み、窺^{うかが}ってくるユリウスに淡い笑みを浮かべて「なんでもありません」と答える。そして。

「申し訳ございません、ユリウス殿下。まだ少し眩暈^{めまい}が……」

俯いたまま毛布を握り締め告げた。

「そうだったね。ゆつくりと休んでから、ハイノと一緒に王城へ向かえばいいよ。私は先に戻っているから」

「ありがとうございます」

アリステルは、始終ユリウスと視線を合わせないよう、ずっと俯いていた。目を合わせたら、心が揺れてしまう。一度でも好きになった人なのだ。それも、二度と会うこともないはずだった人なのだ。死の直前に幻まで見た人なのだ。

これ以上ユリウスに惹かれてはいけない。そして、胸が痛くても、男爵令嬢との仲を裂くようなことは絶対にしない。

ユリウスがアリステルに冷たくなった時点で、誰かに相談して婚約を解消する努力をしよう。そうして、ユリウスたちの前から消えてしまえばいい。

だけど。

「おやすみなさい、ユリウス殿下」

男爵令嬢の存在が出てくるまで。少しの時間でいい。ユリウスと同じ時間を過ごすことを許してください。

アリステルは閉じていくドアの隙間から見えるユリウスの背中に視線で懇願していた。



夢を見た。

まだ死ぬ前の……貴族子息だった頃の懐かしい夢。

——これからよろしく願います、ユリウス殿下。わたしのことはアリスとお呼びください。冷え冷えとした教会での婚約式を終え、アリステルの身分が準王族になったため、王城に滞在するようになってすぐ。交流のために催されたお茶会の場で、アリステルは不機嫌なユリウスに相對していた。

広々とした庭園は初夏の花が競い合うように咲き乱れ、湿った風に乗って甘い香りを漂わせている。優美なユリウスにとっても似合っていたが、その彼はアリステルから目を逸らして茶を嗜んでいた。この婚約は王族として異例の物だった。普通は王族ならび貴族の婚約や結婚は、異性同士が通例だからだ。では何故、王太子ユリウスの婚約が同性であるアリステルになったのかは、ユリウスの出自に関係していた。

ユリウスは、王太子という立場であるものの、彼は正妃の実子ではない。父は現王エメリヒだったが、母は王妃の侍女として勤めていた伯爵令嬢だった。長年王妃との子宝に恵まれなかったことと、癩癧^{かへき}持ちの王妃との生活が嫌で、王はこともあろうに若い侍女に手を出してしまった。

そうして誕生したのがユリウス。長子が王太子になるのが決定づけられているせいで、必然的に

ユリウスが王太子となった。彼を産んだ侍女も側妃となり、離宮のひとつを与えられた。

側妃が先に王太子を産んだ。この歪んだ誕生は、王妃の怒りを募らせるのに十分だった。

その日から側妃とユリウスは命の危機に晒^{さら}される日々が続く。冷遇から始まり毒に暗殺にと、あらゆる奸計^{かんけい}が母子に降りかかった。そんな状況にも拘^かわらず、エメリヒからの救いの手はなく、ユリウスが六歳の時に毒によって側妃は儂^{はかな}くなってしまった。

王妃の逆鱗^{ぎゃくりん}に触れるのを恐れ、ユリウスには後ろ盾がなかった。何度も命を危ぶまれたユリウスは当然ながら人嫌いになり、母に与えられた離宮でハイノをはじめ、極少数の人に囲まれ生活をしてきた。

ハイノの父は現王の実弟で、彼の妻はユリウスの母とは遠戚関係にあった。その縁で王妃の魔の手から守るため、ユリウスの右腕として侍るようになったと、前の生で誰かから聞かされた。

このままユリウスは王太子から王になり、女性を娶^{めと}るはずが、納得できない王妃が阻^{はば}んできた。

ユリウスが生まれた二年後に王と王妃の間に王子が誕生していた。ユリウスという存在がなければ、彼が正式な王太子になっていたはずが、現実には先に生まれたユリウスが王太子になっている。王妃を含め、彼女の実家であるフリーリング公爵の奸計により、王にひとつの提案がなされた。

高貴なる王の血脈に、家格の低い伯爵家の血を混ぜてはいけない。ユリウスが王になるのは百歩譲^やって許しても、次の王になる者の血にユリウスの血を混ぜるのを、貴族たちは許さないだろう。だからユリウスの伴侶には男性を立て、決して子を生^なすのを許さない。

本来なら勝手な言い分を放つ王妃を諫めるはずの王も、後ろめたい感情があったのか、王妃の主

張を受け入れるしかなかった。そうしてユリウスにあてがわれたのは、フリーリング公爵と親戚関係にあったエルネスト侯爵家子息、アリストテルだった。

アリストテルはエルネスト侯爵と隣国の公爵令嬢との間にできた子供だった。そもそも政略的意味合いのある婚姻。当初から冷えていた関係に加え、他国での生活に実母の体は弱っていった。彼女はアリストテルの出産と同時に儂くなり、アリストテルは使用人たちによって育てられた。

というのも、エルネスト侯爵には長く交際していた子爵令嬢が存在し、前侯爵から結婚を反対されていた経緯がある。前侯爵はアリストテル誕生後、夫婦揃って流行病で亡くなった。それを好機と喪が明けてすぐに再婚した。ふたりの間に子供が生まれ、アリストテルの立ち位置はあつという間に挿げ替えられてしまった。

だから、似たような環境で育ったユリウスに対し、アリストテルが惹かれていったのも仕方ないだろう。

同性である以上、決して実を結ぶことはできないにしても、絆を結ぶことはできる。アリストテルは婚約してから歩み寄る姿勢を見せ続けたものの、ユリウスは同性の婚約者に対して冷たい態度で返すばかりだった。

——あの春色の空に僕の姿を映してくれたら……

小さな願いは叶うことなく、ユリウスの心はひとりの男爵令嬢へと向けられるようになった。

出会いは思い出せない。気づけば、ふたりに王城の庭園でお茶を楽しんでいた、時にはハイノと三人で和気あいあいと会話をしていたり。本来ならそこはアリストテルの場所だったはずなのに、

アリストテルは傍観するしかできなかった。

元々アリストテルの立ち位置は不安定だった。王族や貴族の婚姻にありえない同性の婚約者。それも次期当主の座を義弟に奪われた情けない令息。王太子に望まれない哀れな王太子婿候補。

いくらアリストテルがユリウスを慕っていたとしても、相手が受け入れなければ、ただの一方通行。

——ただ幸せになりたかったのに……

結局、死ぬ直前まで叶うことはなかった——

◇ ◇ ◇

ガタンツ、と衝撃が体を揺らし、ぼんやりしていた意識が鮮明になる。前の時の夢を見ていたようだ。同時に、今いるこの時は、なにかの原因で時が巻き戻ったらしい。正直自分の頭を疑ってしまいが、どうやら現実らしい。

「エルネスト侯爵令息どの、大丈夫ですか？」

正面から声をかけられ、アリストテルは声の方へ首を動かす。ユリウスの側近で、前の生の時にアリストテルを平民街に送った人物。ハイノ・ヘルプスト公爵令息が、心配を顔に浮かべてアリストテルを見ていた。

ヘルプスト公爵は現王エメリヒの実弟で、現在は宰相として陛下を支えている。臣下にくだった際、ヘルプスト公爵令嬢と婚姻を結んだ。ハイノはヘルプスト公爵の三男で、ユリウスと同じ歳の

ため、幼少期から行動を共にしていたそうだ。いわゆる幼馴染という関係らしい。

それ故か、ユリウスの環境に同情し、アリステルの立場に批判的だった。加えてハイノはユリウスと恋仲の男爵令嬢に惹かれていたのもあって、特にアリステルに対しては冷ややかな態度で接していた。

「ありがとうございます。大丈夫です、ハイノ様」

いくらアリステルが王太子の婚約者になったといえども、自身は侯爵子息なのは変わらない。対してハイノは公爵子息。最高位貴族に対する礼儀をもつて接するにかぎる。

前の生では、エルネスト侯爵家の問題で、アリステルにはまともな教育を得る機会はなかった。そのため、準王族になったという妙な自信のせいで、傲岸不遜な性格になってしまった。それがユリウスとの関係に溝を作っていたのは頭で理解していたものの、人と接する機会のなかったアリステルには、どうしたら改善できるか分からないままだった。

しかし、準王族として王城の一室を与えられ、王族教育を受けるようになってその自信は消失した。自分の行いが失礼で咎められてもおかしくないものだったと。穴があつたら入りたいと、何度思ったことだろうか。

含羞と教育の記憶が残っていたおかげで、ハイノに対しても間違つた対応はしていないと信じている。卑屈さが滲んでしまうのは、過去の関係性のせいだ。

「いいえ。倒れたのですから、城に戻ったらすぐにおやすみになってください。陛下との謁見は明日に変更しますのです」

「そ、そんな。陛下もお忙しいのに……。僕のことなら大丈夫です。当初の予定通り、陛下に謁見します」

前の記憶通りなら、入城してすぐにエメリヒ陛下との謁見の時間があつた。だが数言、言葉を掛けられてすぐに終わってしまったので、そこまで体に負担はないだろう。

「分かりました。ただ、一度ユリウス殿下に尋ねたうえで決めますが、よろしいですね」

「はい。ハイノ様も多忙なのにすみません」

実際、ハイノはユリウスの補佐をしている。忙しさはユリウスと同等なはずだ。彼の手を煩わせてしまったことに消沈していると。

「エルネスト侯爵令息どの、こういった調整もわたしの仕事なので心配なく。まだ王城に着くまで、少し時間があります。その間は体を休めてください」

アリステルを気遣う言葉が投げかけられ、俯いていた顔を上げてしまう。視線の先にあったのは、かつてアリステルに見せていた無表情ではなく、穏やかに微笑む淡い濃紺の髪と灰青の瞳を持つ青年の姿だった。

ユリウスもそうだが、ハイノの態度も前とは違いすぎて、アリステルはただただ困惑するばかりだ。ただでさえ、自分が死んでから時間が巻き戻ったうえで生き返ったことに、理解できていないのに。次から次へと前の生とは違う状況が舞い込み、アリステルはまたも脳処理が追いつかなかった。（よく分からないけど婚約が成立した以上、前と同じ展開になるなら、男爵令嬢とユリウス殿下は出会うはず。断罪される未来を回避できないのなら、今度はあんな寂しい死にならないよう、今か

ら動くべきだよね」

石畳を回る馬車の音色を聞きながら、アリステルは決意に手を小さく握った。

婚約式を執り行った大聖堂は、平民街の東端にあり、近くに大きなシルト川が流れている。川の水の終着点は、フリーリリング公爵領にあるブラウ湖で、貴族たちの避暑地として有名だ。また、このシルト川は、王城と貴族街、平民街と貧困街を隔てているため、自然の要塞の役割を担っていた。アリステルは賑わう街並みをぼんやりと眺めている。積雪地帯のため、傾斜のある屋根が特徴で、焦げ茶の木組みと漆喰の白壁の建物が並ぶ。煙突から白い煙がゆらゆらと空に昇り、とても長閑だ。このあたりの建物の屋根に傾斜があるのは、雪が降っても自然と落ちるようにだ。尖った屋根が並んでいるのが、可愛いと感じる。

区画によって軒を連ねる店の業種は変わってくるが、王城や貴族街に向かう橋に近いこのあたりは、噴水広場があるためか食料品関連の店が多い。ユリウスから婚約破棄される前は、ほぼ王城から出たことがないため、自由な時間を過ごす人々が眩しく見えた。

昔のアリステルが広場に近づくとき、人々は鼻に皺を寄せるだけでなく、時には石を投げることもあった。みすばらしい姿も理由のひとつだろうが、大半の理由は、アリステルが街の鼻つまみ者だったからだ。

（彼女は平民街の人気者だったから）

平民街にある孤児院で手伝いをしていたり、貧困街では炊き出しをしていたり。ほぼ平民と変わらぬ男爵家に、そこまでの資金があつたのか不明だったが、彼女はかなり頻繁に慈善活動をしてい

たと記憶している。

ユリウスは心優しい男爵令嬢に心惹かれ、次第に恋仲になっていった。そしてアリステルの存在を疎ましいと感じるようになっていった。この婚約が、ユリウスの命を守るための方法だったとしても、彼は自分の心に素直に従ったのだろう。結果、アリステルひとりだけが絶望の淵に突き墮とされるとしても。

「エルネスト侯爵令息どの？」

訝（いぶ）かようなハイノの声が聞こえ、思案に暮れていたアリステルは、ハッと我に返る。

「顔色がすぐれないようです。やはり、まだお体が……」

「いえ、大丈夫です。お気遣い、ありがとうございます、ハイノ様」

「ですが……」

「それから、僕のことアリステルとお呼びください。家名はあまり慣れてないので」

にこりと微笑むと、ハイノは苦い物を飲み込むような顔をして「分かりました、アリステル様」と応えた。

馬車がそろそろ橋に差し掛かる頃、窓から見えた光景に、アリステルは慌てた様子で「馬車を停めてください！」と叫ぶ。

唐突の指示に馬が嘶（いな）く中、アリステルは扉を開き、外へと飛び出した。

「アリステル様!？」

背後からハイノの諫める声が聞こえるも、アリステルは構わず広場の一角へと駆けていく。目的

はならず者たちの集団だ。彼らは何かを囲むように立ち、見下ろしている。周囲は不穏な空気を感じてか、足早に避けていた。

「その者たち、一体何をしている！」

アリステルは声を張り上げ、集団に詰問する。男たちは一瞬ギョツとした表情を浮かべたが、その叫んだ人物が華奢な貴族の男だと分かると、目線を交わしてニヤリと嗤った。下卑た笑いに薄気味悪さを覚える。

彼らの足元には、白い神官服を着た男性がうずくまっていた。フードを深くかぶって、表情を窺い見ることはできない。

「いやいや、誤解ですって。俺たちは神徒さまがうずくまってしまったので、心配して声をかけたんですよ」

「そりゃ、俺たちはお貴族さまから見たら、底辺の庶民ですけどね。体調の悪い人に、何かしようなんて考えありませんよ」

言葉とは裏腹にニヤニヤ嗤う男たち。言い分と本心が正反対だというのが明白だ。

貧困街の一部の住民は、ひ弱な人間を攫って奴隷として売るといった悪事を働いている。前の時には、アリステルも何度か狙われたものの、汚く痩せ細った姿に商品価値はないと知り、代わりに到底人が食べられない物を売りつけてきた。おかげでアリステルの寿命は加速して縮んでいった。アリステルはチラリと男たちを見遣り、それから静かに神官服の男性に近づき、彼の前に跪く。

「……神徒様、彼らの言うことは本当でしょうか」

素早く目の前の人を確認する。長衣のあちこちに汚れが付着していて、体調が悪い人を心配しているという彼らの言葉に疑問を持つ。アリステルからの質問に、神官服の男は曖昧に頷いた。きつと否定すると、アリステルまで巻き込むと思っているのだろう。

「ご協力感謝します。僕がこの方を診療所へ連れて行きますので、ご安心ください」

「お貴族さまの手をわずらわせるわけにはいきませんから、俺たちがこの方を連れて行きますよ」男たちの表情のどこにも神徒を案じる様子はない。むしろ、神徒を舐めまわすように見ている。それはアリステルにも波及していた。

「大丈夫です。あなたたちに、この方の診療代の負担を掛けさせるのは、心苦しいですから」

隙を見せてはいけないと、毅然とした態度で言い放つと、うずくまる男性をゆつくりと立たせて去ろうとするが。

「待てよ。人の好意を拒否するとか、これだからお貴族さまはよお」

「というか、俺たち平民なんて、路傍の石と同等なのだよ。あー、悲しいよ、俺は」

「この傷ついた心を癒すには、お貴族さまからお布施いただかないとなあ」

要は金をよこせ、と彼らは暗に言っているようだ。アリステルはチラリとある方向に視線を走らせたあと、ゆつくりと口を開く。

「断る」

「っ、なんだとー」

強い拒絶に、一瞬男たちは呆けたものの、すぐに赤ら顔で気色ばむ。激高した彼らは、白い服の

男を庇うように立つアリステルの腕を掴み、それぞれに怒って叫んでいた。

悪意ある声のアリステルに集中する。それはかつての断罪を思い出させ、たまらず身を竦^{すく}ませてしまう。背後に庇っている男も恐怖からか震えているのを感じた。

周囲にいた無害な人たちは、自分たちも巻き込まれたくないと、見て見ぬふりをする。噴水広場はあつという間に無頼漢どもの独壇場と化していた。

万事休すといった所で、男たちの身柄は瞬く間に、ハイノが采配した騎士たちによって制圧されてしまった。

「アリステル様！」

ハイノの声が聞こえ振り返ると、焦ったように駆けてくる姿が認められる。いつもは無表情で冷静沈着な彼の姿に、アリステルは瞠^{ぎょく}目した。

「大丈夫ですか、アリステル様！」

「え、ええ。特に怪我はありませんが……」

ゴロツキに掴まれた腕がわずかに痛むが、泣きそうに顔を歪めるハイノの心痛を増やすつもりはない。あえて言葉にしなかった。

「私をもっと早く指示を出していたら……」

「いえ。結果的にこの時機で良かったです。僕に集中していたおかげで、捕まえることができましたので」

下手をしたら、彼らが逃げ出してしまう可能性だってあった。そうならばまた同じような事件が

起こってしまう可能性が高い。多少の犠牲があっても、結果が良ければ問題ないだろう。

「それより、僕よりも彼のほうが……大丈夫ですか」

「はい。助けてくれてありがとうございます」

ふ、と上げた神徒の顔を見たアリステルとハイノは息を呑む。それは今、王城にいるはずのユリウスと瓜二つだったから。騎士も神徒がユリウスと似ていることに気づいたのだろう。背後で「ユリウス殿下!？」と驚愕^{きょうわく}している声が聞こえる。王宮にいるはずの王族がこんな市井にいるとは普通考えないだろう。視察が入っているとも知らされてはいないだろうし。そもそも当のユリウスは、婚約式のと城に帰ったことを騎士たちも知っているはずだ。

「あの……?」

自分を見て驚く周囲に、神徒はオロオロと戸惑っている。アリステルは緩く首を振って口を開いた。「っ、この方は殿下じゃありません。遠回りになりますが、この方を診療所に連れて行きます」

「アリステル様」

「ですが……。アリステル様を王宮までお送りするのが……」

ハイノや騎士たちがアリステルの行動を諫めてくる。だが、ここで騎士に引き渡すつもりはなく、毅然^{きぜん}とした態度で言い放った。

「準王族である僕が、このまま王都に住まう方を放置して、王宮に行くことはできません。それに、民がいるからこそ、貴族も貴族として成り立っているのですから」

本当は王族も、と言いたかったがさすがに不敬だと思い、言葉を飲み込む。厳しい顔で言い含め

るアリストテルへ、ハイノは小さく吐息を落としてから提案してきた。

「分かりました。この方もそうですが、アリストテル様も診ていただきましょう」

「僕は大丈夫ですが」

「今は良くてあとから何があるか分かりません。念のため診ていただきましょう」

ハイノの言い分は理解できる。前の時にそういった経験を何度かしたことがある。小さな怪我があとから化膿して、発熱で苦しい思いをした。

「そう……ですね。ハイノ様の言うようにします」

固辞し続けて、ハイノにまた悪印象を与えるのは憚られる。承諾に頷くと、騎士たちがそれぞれの役割に走った。

◇ ◇ ◇

診療所は噴水広場から割と近い場所に建っていた。騎士が先触れを出していたおかげで、アリストテルと神徒の男性も、待たされることなく診察を受けることができた。

アリストテルの腕には男たちが力任せに掴んだせいで、軽く痣ができていたものの、特に治療は必要ないとのこと。もし異変が起きたら、王宮医に診てもらうようにと、緊張に顔を強張らせた医師から告げられた。

「大きな怪我でなくて安心しました」

「はい」

神徒の治療が終わるまで、アリストテルとハイノは診療所の客間で待つことになった。騎士たちは診療所の外で警備をしているらしい。

アリストテルはハイノが淹れてくれたお茶を飲もうと、テーブルの上にあるカップを持ち上げる。

微かに腕に痛みが走るが、顔には出さずに湯気の立つカップに唇を寄せた。喉を通る爽やかな香り。思わずほうと息をこぼす。

「お口に合いましたか」

正面から聞こえたハイノからの問いかけに「はい」と頷く。きっとユリウスにも頻繁に淹れているのだろう。慣れた所作で淹れたお茶は、先ほどの疲れを癒すに十分な美味しさだった。

「とても美味しいです。ハイノ様は器用な方なのですね」

「ありがとうございます。ユリウス殿下は放っておくと、飲食すら面倒臭くなるので、致し方なく会得した感じですね」

苦笑するハイノに、アリストテルは淡く微笑む。彼とこんな風に雑談ができるなんて。

（前の頃も歩み寄れば、何かが変わったのだろうか）

脳裏に浮かんた言葉を、すぐに振り払う。ハイノはユリウスに心酔していたが、かの男爵令嬢へ恋慕を抱いていたのに、アリストテルは気づいていた。泣きそうな、愛おしさが込み上げそうな表情で、ハイノは男爵令嬢を見ていた。その眼差しはアリストテルがユリウスを見ている表情と同じだった。

だからこそユリウスの暴挙を止めることはなかったし、アリストテルを放逐することにも手を貸

した。

アリステルの脳裏に、ハイノと一緒に馬車に乗った記憶が蘇る。

(今の優しい彼が、夢か幻なのではと、疑う自分がいる)

こちらを見て微笑むハイノの視線から、思わず目を背けていた。

気まずさを感じる室内に、扉の開く音が聞こえる。アリステルとハイノも、音のする方へ顔を移すと、騎士に付き添われた神徒が立っていた。騎士の顔が強張っているのは、ユリウスにそっくりなせいだろう。そんな事を知らない神徒は、少し首を傾げながら中へと入ってきた。

ハイノが立ち、怪我人の神徒をエスコートして、今まで自分が座っていた場所を勧めている。その足でお茶を淹れる支度を始めているのを横目に、アリステルは正面に座る美しい人を眺めた。

白銀よりも白に近い髪は腰まであり、サラサラと音がしそうだ。春色の空の瞳はまっすぐにアリステルを見つめ、目が合うとふわりと微笑んでいる。ユリウスに似ているが、彼はこんなに緩やかな笑みを浮かべない。

「お怪我の具合は大丈夫でしたか？」

「ええ、打撲と診断されましたが、薬をいただいたので大丈夫です」

「良かったです。あ、申し遅れました、わたしはエルネスト侯爵が長男のアリステルと申します」
本来なら、侯爵子息である自分から身上を告げることとはしない。だが例外はある。教会の者に対しては、彼らのほうの地位が上とされる。それは王族も同等だ。

この国の成り立ちが、神が創造したとされているから。故に王族や貴族を含めた国民は、神の使

徒である彼らに敬意をはらう。

「しかし、蹴られるとあんなに痛いなんて思いもありませんでした」

袖からチラリと見える包帯や片頬を覆うガーゼといった、どう見ても怪我人という様相をした神徒は、ヘラリと笑って感想を述べる。感想が斜め上なのは、ハイノのなんとも言えない表情で分かる。きつとアリステルも同じような顔をしているだろう。

「ですが、死ぬまでとならなかったのは、皆様のおかげです。ありがとうございます」

「いいえ。こちらこそ、もっと早くお助けできず、申し訳ありません」

丁寧に感謝を告げる神徒に、アリステルも間に合わなかったことについて詫言をする。

しばらく応戦合戦が続いたが、ハイノが制止してくれ、お互い困ったように笑ってしまった。

「今更ですが、私は創世神教会で司教を賜っているエルレと申します」

「司教様……」

金糸の刺繍が入り、質の良い祭服を着ていたから、それなりに地位が高い人だと予想していた。まさか司教だとは、と驚くアリステルだったが、ふと疑問が湧く。今日、ユリウスと交わした婚約式に立ち会ったのは、大聖堂の司教だった。他にも司教がいても可笑しくない。だが白い髪と青い瞳、国の王太子に似たエルレなら、噂になってもいいはずだ。つまり彼は王都の教会に在籍していないのでは。アリステルは頭の中が疑問に占められていた。

「この王都外れの小さな教会に在籍しています。美しいステンドグラスが見ものなので、よろしければ是非」

ニコニコと話すエルレをよそに、アリステルの心臓は激しく高鳴った。
 (街の外れにある教会……それって)

美しいステンドグラスとくれば、アリステルが命を終えた、あの廃礼拝堂なのでは。ドツドツと跳ねる心臓を、服の上から必死で押さえ口を開く。

「あ……の礼拝堂は、廃墟になっているのでは」

「いいえ。普通に機能していますよ。多少古くて不便はありますがね」

え、と悲鳴をあげなかった程度には常識が残っていたようだ。アリステルが記憶している廃教会とは別の教会なのだろう。自分に言い聞かせ、再度教会の場所を尋ねたものの、エルレから返ってきた答えは、アリステルが死を迎えたあの教会だと言う。

(そんな……何故……)

記憶の齟齬に、アリステルは混乱して血の気が引く。

当時のアリステルが死んだ時を考えても、少なくとも数十年以上使用されていないだろうというボロボロ具合だった。つまり、現時点である教会は廃墟になっているはずだ。一体どういうことだ、と手で頭を抱えているさなか、建物の外から馬の嘶きと喧騒が耳に伝わってきた。誰か急患でも来たのだろうか。

「なんでしょうか。アリステル様、念のため様子を見てきます」

「は、はい」

動揺しながらもハイノに返したアリステルの心は、外に意識を向ける余裕はない。

扉の向こうに消えるハイノを、ぼんやりと見送る。厚いドア越しに何かを言い争う気配を感じるが、今のアリステルの心情は、それどころではない。混乱以上に、自分の知っている世界との差異に恐怖すら感じていた。

「アリス！」

激しく開かれたドアと共に、アリステルの名を叫ぶ声が部屋に響く。現れたのは、陽に透けそうな金の髪と、春空の瞳を陰しくしたユリウスだった。

本来いるべきではない人がいるという状況を前にすると、人というのは思考が停止するものらしい。

「ユリウス殿下!？」

「アリス。大丈夫？」

やっと目の前の人の名を叫ぶことができた頃には、彼の人にギューと抱きしめられた後だった。長い腕がアリステルの体に絡みつки、あまりの強さに肺から空気が押し出される。苦しいと背中をタップするものの、ユリウスはアリステルの首筋に顔を埋めて、更に拘束が強くなる。鼻腔に、以前は遠く風に乗って香る程度のユリウスの匂いが、苦しくなるほど濃厚に香った。

前の生では、決してここまで密着することはなかった。だから予想外の状況に、心臓が激しく暴れまわる。

「あの、殿下。できれば離していただけると……」

「やだ。騎士の話ではゴロツキに、襲われかけたというじゃないか」

「いえ、それは」

「アリスは可愛いんだから、そんな者たちに近づくと攫^{さら}われてしまうよ」

甘い言葉を囁^{ささ}かれ、アリステルの顔にカッと熱が集まる。

アリステルの言い分を封じてユリウスは強い口調で論してくる。前のユリウスとの差に目を白黒させていると、首筋に何か濡れたような感触がして、肩が微かに跳ねた。

「え、ユリ……んっ」

ヒヤリ、と空気が触れた場所に冷たさを感じる。困惑の中で更なる驚きが襲^襲ってきて、アリステルは思わずユリウスにしがみつく。首筋に顔を伏せたユリウスが、「アリスはどこも甘いな」とくぐもったような声で告げ、再びアリステルの首筋を下から上へと濡らしていった。

濡れた感覚の原因が、ユリウスが舐めたことだと気づき、アリステルの熱は全身に広がっていく。腰を撫でられ、そこからジンと甘い痺^{しび}れが走る。自然と吐息がこぼれ、頭の中が酩酊^{めいて}していった。

これまでユリウスだけでなく、誰とも触れ合うことのなかったアリステルの脳内は、突如訪れた性的な接触で混乱の極みに落ちていきそうになる。

「ひ、……うっ」

「……ふふっ、可愛い、アリス」

腰の上をユリウスの大きな手が這う。自然と息が乱れ、抵抗を奪われる。

腰のあたりがゾワツとし、たまらず体をビクンと震わせると、ユリウスが囁くように笑う。性的な匂いをさせる態度に、ユリウスが意地悪をしたのだと分かった。

「で、殿下……戯^{あそ}べは……んっ」

注意をするものの、またも首筋を大きく舐められ、喉から艶^{なま}めかしい声が漏れてしまう。前の生から性的な接触を経験したことがなく、とんでもない不敬を働いてしまったのかと、全身の血が凍りつくように冷たくなった。

ボロリ、と涙が紅潮した頬の上を転がっていく。

「ああ……泣かないで、アリステル。君が可愛くて、ついついやりすぎてしまったようだ」

困った顔でアリステルの目尻を指で拭うユリウスに、自分が泣いていたのだと知る。たかがこんな事で泣くなんて、ユリウスに嫌悪されてしまったらどうしよう、とアリステルは慌てて謝罪を口にする。

「いいえ。いいえ、殿下。僕こそ無礼を……」

「アリス、私のことはユリウスって呼んで？ 殿下って言われると、壁を感じて寂しいな」

涙で湿った頬を撫でながら、呼び方について訂正をされたけど、さすがに承服しかねる懇願だった。いくら正式な婚約者であっても婚姻するまではユリウスは王族で、アリステルは侯爵子息なのだ。とはいえ、強固に反発するのも、優しくなった彼の気持ちを害するのでは。

「じゃ……じゃあ、ユリウス様」と呼んでいいですか？」

どんな反応が返ってくるか不安になりながら、ユリウスを見上げて提案すると。

「アリスは恥ずかしがり屋だから仕方ないね。じゃあ、慣れるまで、それでいいよ」

春空の瞳を細めて、アリステルの頬に唇を落としてきた。チュッ、と頬のあたりで弾ける音がす

る。それがキスだと気づき、全身の血が沸いたように熱くなった。

甘すぎるユリウスの行動が恥ずかしくて、たまらずユリウスの胸に顔を隠す。耳にユリウスの鼓動が規則正しく伝わる。自分の心臓は激しく高鳴っているというのに、周囲の目があっても気にする様子のないユリウスに感心した。

「照れているアリス可愛い」

と、頭にも度々キスしてくるユリウス。アリステルは羞恥で、体の中で熱が暴走しそうだ。

この人は自分が知っているユリウスなのだろうか。春の空色の瞳を凍てつかせ、睨んできた婚約者と同じ人なのだろうか。男爵令嬢の肩を抱き、感情もなく切り捨てた殿下なのだろうか。

同じ時間軸にいるはずなのに、別の世界にいるかのような感覚に混乱していると、「なにをやっているのですか」と咎めるような声が聞こえてきた。

「なんだ、ハイノ。婚約者と親交を深めているのに、邪魔をするな」

チラッと声が出た方を見ると、開かれた扉にもたれるようにして、腕を組み不機嫌な顔をしたハイノが立っていた。ハイノの脇に立つ騎士たちは、みな赤面であさつての方向に顔を背けている。中には前かがみがちな騎士もいた。

「愛おしくて仕方ないのは理解しますが、ここはあなたの自室じゃないんです。人目があるのを忘れないでください」

「こんなに綺麗で、可愛いアリスを見せびらかせたいに決まっているじゃないか！ あ、でも、潤んだ瞳で艶っぽいアリスを誰かに見せるのは却下だな。というか、ずっとアリスは私の顔だけを見

て過ごせばいいな」

「え……、あの、ちよつと……」

「早速王宮に戻ったら、アリスの部屋を、私の部屋の隣に移してもらわなくては！」

「ええ？」

「落ち着きましょう。暴走しすぎです、殿下」

すでにアリステルの部屋は整っているはずだ。ユリウスの住む王宮から離れた貴賓室。王族教育をする教師たちが来るのに利便性が良く、婚前に淫らな関係とならないようにと配慮された配置だった。

前のユリウスは貴賓室に近づくことはなかったし、アリステルも王族教育に忙しかった。婚約者なのにすれ違いの関係というのが、周囲の認識だった。

今回も前と同じなら貴賓室になると思っていたのに、ユリウスからの提案に度肝を抜かれる。

「無理を言わないでください。既に部屋は準備が済んでいるそうですし、結婚するまでは純潔を守る必要があるですよ」

忘れたわけではないでしょう？ と濃紺の髪を揺らし、灰青の瞳が呆れたように細められる。ユリウスもハイノの軽口を咎めず、アリステルをギュウギュウと抱きしめている。きつと、昔から二人の関係は主従というより、古くからの親友という色が強かったのを記憶している。

家族愛に恵まれなかったアリステルは少しだけ羨ましく感じながらも、二人のやり取りに戸惑っていた。

（ユリウス殿下もだけど、ハイノ様からも距離を置きたいのに）

男爵令嬢の言葉を疑わず、ハイノもかつてのアリステルに対して良い感情を持っていなかった。ユリウスに近寄ろうとすれば、厳しい言葉で遠ざけ、アリステルの証言を最後まで信じてくれなかった。そうして実家から少しだけのお金を渡され、泣き喚くアリステルを馬車に押し込み、平民街の入り口でアリステルを放逐した。あの冷徹な表情を今でも忘れない。

だからユリウスだけでなくハイノまで前と違う態度に、アリステルは困惑し、視線を部屋の中に巡らせる。が、先ほどまでいたはずのエルレの姿がどこにもない。

テーブルにはまだ湯気を揺らすカップがふたつ並んでいる。いつの間に彼は退室したのだろうか。

「あ、あの、ユリウスでん……様」

「ん？ どうしたの、可愛いアリス」

「僕と一緒に司教様がいらしたのですが」

「司教って？」

甘い言葉で耳を傾けていたユリウスだったが、アリステルの疑問に眉をひそめる。ハイノも同じ表情で首を傾げていた。

「いや、私がこの部屋に飛び込んだ時には、アリスだけだったけど？」

「わたしも殿下が中に飛び込んで程なくして部屋にきましたが……不思議ですね」

「……」

白髪と春空色の目のユリウスに似た神徒が煙のように消えてしまった。

一体どうしたことなのかと、不安になったアリステルは、ユリウスの外套を強く握り締めていた。

◇ ◇ ◇

馬車に再び揺られながら、アリステルは忽然と消えたエルレのことを考える。

（場が騒然としていたから、人ひとりが退出しても気づかなかった、と言われても納得はできる。だけど、ドアにはハイノ様だけでなく騎士もいた。そんな中、ユリウス殿下に似た人物が近くを通って、あっさり見逃すことがあるのだろうか）

思案に暮れるものの、別のことで考えが霧散してしまう。

「あ、あの……」

「ん？ なんだい？」

「お、下ろしてください……」

「だあめ」

甘く微笑むユリウスは反論とともに、膝の上に座っているアリステルの腰へと回した腕に力を込めてきた。

（ど……どうして勃っているの……！）

お腹に回された腕が一層強くなり、首筋にユリウスの吐息がかかる。それだけでなく、臀部に何か硬い物が押し付けられ、相手が王族でなかったら殴っていた。そんな暴挙に出る勇氣はなかった

けども、恥ずかしい物は恥ずかしいし、必死な抵抗を止めるつもりはなかった。

「ハ……ハイノ様……」

助けて欲しいと目で訴えたものの、すぐに「アリスは余所見しちゃダメだよ」と、ユリウスの指がアリステルの顎を捕らえてしまった。

ハイノの冷ややかな視線に晒され続けるのは勘弁してもらいたい、とアリステルは両手で顔を覆いたかったが、ユリウスの腕に囲まれているためそれもできない。

（この人は、僕の知っているユリウス殿下なのだろうか）

前のユリウスと余りにも違う態度に、どうしたらいいのか戸惑うばかりだった。

王都の構造は三層に分かれる。

広大な森を背にして、半円状に王宮を含めた王城があり、貴族が立ち入れるのは一部の施設のみとなっている。次に王城を囲むようにして貴族街が存在し、王城に近ければ近いほど高位貴族の王都での住まいとなっている。基本的には貴族は領地を賜っており、そちらを管理している貴族が多く存在する。そのため、王都の住まいに常駐しているのは、領地を賜っていない貴族か、王城で仕事をしている文官または騎士たちだ。

そして、貴族街と大きな川を挟んで存在するのが平民街だ。唯一の交通手段は日中だけ開放される橋で、前の時にハイノによって放逐された際にも、その橋を通ったのを覚えている。平民街から貴族街に入る時は通行証が必須だと聞いたことがある。だから前の生の時は、何度か橋を渡って戻

ろうとしたものの、橋で警備している騎士によって阻まれ絶望したのは記憶に残っていた。

相変わらずアリステルの腰のあたりを、ユリウスの手が這い回る。ふしだらな熱が燦るのを、窓の外に意識を向けてかわすことにした。

平民街は今日も人で賑わっている。先程までの騒動が嘘のように、買い物を楽しむ女性や、客引きをしている男性。道を子供たちが走り回り、ベンチに座る老人は好々爺の笑みで眺める。

笑顔で溢れたその場所は、とても、とても優しい午後の景色。

（だけど、前の時は、僕にとって地獄の場所だった）

馬車が、平民街と貴族街を繋ぐ橋を、渡るのを眺めていたその時。波打つ栗色の髪 of 女性の姿が人波の合間から見え、アリステルの心臓がドキリと高鳴る。

（イレエネ・クーニツ男爵令嬢）

数人の男女に囲まれて笑う彼女は、一年後には自分を抱きしめるユリウスと結ばれる運命にある。そして謂れもない罪でアリステルを断罪し、アリステルを排除するため、無罪の者を平民に落とした。

（僕はただ、貴族子息として、同じ貴族令嬢の彼女に苦言を呈しただけだ）

夜会や茶会で、彼女は令嬢らしくない態度で、様々な貴族子息にまわりついた。中には婚約者がいる者にまで近寄り、イレエネはだんだんと奔放になっていった。

アリステルはただ、王太子の婚約者という立場から、イレエネに注意しただけ。それなのに、彼女を囲う男たちはイレエネ以外の諫言に耳を貸さず、諫めた者を糾弾していた。

ユリウスもイレネに心酔し、没交渉だったアリストルを悪とみなし、不安定な立場を更に追い詰めていった。

（そして、殿下主催の夜会で、僕は何かをも奪われ、捨てられた）

否定に叫んだ。自分は危害など加えていないと、喉が哽れるまで訴えた。しかしイレネを庇う男たちはアリストルの言葉を信じず、ユリウスの采配で、即刻市井へと捨てるよう命令したのだ。

秋も深まる初冬のある夜の出来事だった。

（もう……あんな辛い苦しい日々の果てに死にたくない）

孤独感が蘇り、胸が痛く、叫びそうになるのを、唇を強く噛み締め耐える。

噛んだ唇から血の味がしても、何度も「まだ時間はある」と自分に言い聞かせた。

「アリス？」

「え？」

「どうして泣いているの？」

顎を掬い上げられ、ユリウスと視線を交わす。春空の瞳は、怪訝な色に揺れている。ユリウスの言うとおり、彼の姿が滲んでいたことで、自分が泣いていたのに気づく。だが尋ねられた理由を口にできない。

言葉にしまったら、あの辛かった日々で息が苦しくなってしまうから。だから。

「恥ずかしくて……」

と、ユリウスもハイノも納得できないだろう理由しか言えなかった。

ユリウスはそれ以上の追及はせず、「そうか」とだけこぼして、アリストルを隣におろしてくれた。アリストルの様子を不審に思いながらも、何も問いただそうとしないユリウスの優しさに、前の生の彼もこうだったらと詮無きことを考えていた。

気まぐずい空気を乗せた馬車は橋を渡り、貴族街を抜け、王城の門をくぐり王宮へとたどり着いた。アリストルは下を向き、カラカラと車輪が回る音だけに耳を傾ける。

（また同じ時が始まる……）

俯くアリストルは、ユリウスとハイノがジッと見つめていることに気づかなかった――

高い壁に囲まれた王城は、いくつかの塔が立つ立派な城が目を引く。

これから行く王宮や、ユリウスの住まう王太子宮は王城の後方に建っており、行くにはいくつもの衛兵たちの許可が必要となる。

前日も、おそらく今回も、アリストルが与えられる部屋は、王城の中にある水晶宮の一室だろう。そこは王族が住む宮からは離れているが、来賓が泊まるために警備はかなり厳重だった。準王族となったアリストルの身分は、賓客と同等なのは前の生で学んで知っていた。

窓に面した庭は四季折々の花で溢れ、見る人の目を楽しませる。素晴らしい場所だ。前の生も勉強に疲れた時は庭に出て、甘い花の香りに何度も癒された。あの場所なら慣れているのもあって、そこまで緊張はないだろうと思っていた――が。

「――え？」

時折、慈善活動で出入りしていた水晶宮の門扉が、目の前で通り過ぎて行くのに気づき、アリステルは変な声が出てしまう。

馬車はそのまま王宮の奥へと進み、アリステルの思考は困惑に揺れる。

「ゆ、ユリウス様、どこに」

疑問をそのまま唇に乗せて問いかける。

ユリウスが目細めてアリステルへと手を伸ばしてきたものの、過去の記憶に囚われていたせい、思わず身を竦ませてしまった。

「今日は疲れているだろうから、私の宮……月光宮で休んでもらうことにしたよ」

微笑んで話すユリウスへ、アリステルは目だけでなく、口も丸くすることしかできなかった。

二 月光宮

白樺の森に囲まれた月光宮は静寂を湛え、睡蓮の池がある以外、どこか寂しさを感じる場所だった。アリステルは水面から浮かぶように、ふわりと眠りから覚める。見知らぬ天井画に戸惑ったものの、すぐにここが水晶宮ではないことに気づく。まだ眠気の残る体を起こし、天幕が下りた布越しに、部屋の中を透かし見た。

綺麗に整えられた客間は、どこか寒々しい。その要因は質素な家具が王太子の宮にしては少ないからだ。

「アリステル様、おはようございます。起きていらつしやいますか」

控えめなノックのあとに、ハイノの声が問いかけてくる。アリステルは「はい、起きています」とすぐさま返答すると、失礼しますと前置きをしてハイノが入室してきた。その手にトレイがあり、洗顔用ボウルと水差しが載っている。

（公爵令息で、殿下の腹心が、侍従のようなことをしているなんて）

驚きで目を見張り、アリステルは慌ててベッドから降りると、ハイノへ駆け寄った。

「おはようございます、ハイノ様。僕が持ちますので」

アリステルはハイノの持つトレイへと手を伸ばすが「これも私の仕事なので」と、やんわり拒否

をされてしまった。

「ですが」

「ユリウス殿下の伴侶となるアリストテル様も、同じく仕える主になります。なので、気になさらないでください」

毅然と言い放たれ、アリストテルは洪々ながら頷くしかできなかった。

身支度を整え、ハイノの案内でやってきたのは、硝子^{ガラス}の部屋だった。

「これは温室……ですか」

天井や壁も歪みの少ない硝子で覆われた室内は、射し込む陽光でとても明るい。ユリウスは部屋の中心に設置されたテーブルに居た。アリストテルの姿を認めると嬉しそうに立ち上がる。紺色のフロックコートには銀糸の模様が控えめにあり、ユリウスの淡い金の髪にとても映えていた。

「アリス、おはよう。よく眠れた？」

「殿下、おはようございます。おかげさまで、十分休むことができました」

金の髪が陽に透け、神々しさに目を眇めっていると、ユリウスから「殿下じゃないでしょ」と咎められる。

「ユリウス、って呼んで……ね」

長い指がアリストテルの頬を撫で、朝から淫猥^{いんわう}な匂いを感じさせる。だがゴホンとハイノがわざとらしい咳をし、色づいた空気がパッと霧散していった。

「殿下、色ボケするのは別の日をお願いします。アリストテル様、どうぞこちらにお座りください」
「は、はい」

逃げるようにユリウスから距離を取り、ハイノが示した椅子に素早く腰を下ろす。ユリウスは苦々しい顔でハイノを睨んだあと、チツと小さく舌打ちをしていた。とても王太子がやる行動ではないが、下手に敷^ふくを突^つく気になれず、静観することにした。

ハイノの配膳でテーブルに朝食が並ぶ。ライ麦のパンが籠に盛られ、削りたてのチーズとブルストが数種、皿に並ぶ。エッグスタンドにゆで卵が立ち、カップから綺麗な水色のお茶が湯気を立たせていた。

貴族家庭でよく見る朝食。だが、アリストテルには豪華すぎる食事だった。ただ、お茶以外は全て冷たくなっていた。それは王太子が食すに適さない物だ。いくら毒見で食事が冷めることを理解しているものの、この冷たさは異常に感じた。

（この状況に鑑みて、僕はまだ恵まれていたのかな）

エルネスト侯爵家内において、アリストテルという存在は、冷遇されるのが当然だと思われていた。実の父から一度たりとも愛情を与えられず、全て義弟に注がれていた。食卓すら共にしたことがなく、いつも離れでひとり寂しく食べていた。使用人と変わらぬ質素な食事を。それでも食べることができたのは幸いといえよう。体罰もなく、一定の教育を受けることを許されていたから。

（王妃の実家……フリーリントン公爵から、エルネスト侯爵子息をユリウス殿下に嫁がせることを告げられ、父は義弟ではなく自分を差し出した。不要な自分を捨てるいい機会だと感じたわけだ）